

# 保育あきた瓦版

第51号 平成29年 7月 日 秋田県保育協議会 広報委員会

## 第45回 秋田県保育研究大会 特集

### 第45回秋田県保育研究大会を振り返って

秋田県保育協議会会長 川嶋 眞諒

朝、夕、日脚が長くなり、凌ぎやすい時期になって参りました。川の流れと同じように年々、月日の経つのは早いものだと感じるようになりました。

第45回目の大会を振り返ってみると、保育界においても我が国が戦後の高度成長を遂げる中で、女性の社会進出により大きな発展を遂げてきました。

昭和40年から50年代にかけて、全国に急速に保育所の整備が促進される中で、3歳未満の低年齢保育や障害児保育などの需要が増大し、多様なニーズへの対応が課題とされました。そのような中で昭和50年代半ばにいわゆるベビーホテルが社会問題となり、これを契機に延長保育や夜間保育などへの取り組みが促進されました。その後、出生数の減少により、一時的利用児童数が減少傾向にありましたが、バブル経済の崩壊等により待機児童問題が顕在化し、平成7年度にエンゼルプラン（緊急保育対策5ヶ年事業）が策定され、保育所の計画的整備の促進とともに、地域の一般家庭の子育て支援に対抗するため地域子育て支援センター事業や、一時的保育事業が補助制度化され、保育乳幼児のみならず、地域の子育て家庭の支援についても積極的取り組んで参りました。

平成27年4月に子ども子育て支援新制度が施行されて、早いもので3年目を迎え、いわゆる中間年である。然し、残念ながら事務量が増加し、パソコン導入、ICT、利便性効率が良くなるはずだが複雑多岐にわたる事務処理に頭を悩まし、子ども達と一緒にゆっくり過ごす時間がないのが現状である。

今更ながら、この子育て支援新制度は何が目的であったのか、幼稚園と保育所を複合施設とする為だったのか、又都市部の待機児童解消するためだったのか、メディアでは待機児童問題だけが大きくクローズアップされているが、未だに待機児童解消につながっていないとは到底思いません。確かに入園できない親は困っているが、かと言って解消のための受け皿、保育士確保など具体的な方策が見つかっていないのが現状であり、反面、地方において人口減少地域は、今の制度では全く考慮されていないように思う。保育園の運営が続けられるのか、閉園するかという二者択一の厳しい現状である。

地方の地域においては、未だ豊かな自然環境に恵まれ、四季折々様々な体験、経験することができ、子どもが子どもらしく、伸び伸びとゆっくりした気持ちで思いやりと優しい心を育てる環境が備えている事に気付いていただき、人口減少地域課題の対策がヒントとなり、解決策の糸口となり、国や、地方自治体、関係機関が支援や援助する事によって、子どもたちの明るい未来につながっているのではないのでしょうか。都市部への一極集中が今後さらに進めば、地方地域は荒れた農地と住居、住民が手離し、しいては故郷が滅亡しないことを祈るばかりです。

今研究大会に於いても各分科会でテーマに沿った活発な議論が行われていた。特に発表についてはそれぞれ独自性を発揮し、研究し、勉強の成果が表れており年々レベルが向上していると感じた。これからも乳幼児をよりよくするためには、環境や遊びを通した、一人、ひとりの発達を保護者と共有し信頼関係を構築することが何よりも大切であると考えます。保育の結果も大切だがそれだけに終始せず、遊びのプロセスの中の重要な発達についても、お互いに理解する努力とそのための方法を考える必要があるのではないのでしょうか？

本研究大会を開催するにあたって実行委員長の渡部先生はじめ実行委員の皆さん、顧問の岸先生、関係者の皆様方にはひとかたならぬお世話になりました。紙面をお借りし心から厚く御礼申し上げます。

## 第45回秋田県保育研究大会を終えて

第45回秋田県保育研究大会

大会実行委員長 渡部 健太郎

大会前日の5月31日、県研修委員会との最終打合せの後、開会式場を確認し大会事務局員でざっとリハーサルをしてみました。いよいよ明日は大会本番、準備に落ち度はなかっただろうかと不安がよぎります。

実行委員会では、秋田県最南端の湯沢まで来てくださる参加者の皆様を、笑顔とおもてなしの心でお迎えしようと話し合っていました。

当日は朝から小雨模様でしたが、続々と入場する参加者で1階ホールや2階会場も満杯となりました。湯沢市長始め来賓の方々を先導して所定の席に座ると開会式スタートです。

午前の部が終了し、午後の分科会会場への配置換えに手間取り、第1・2分科会の昼食時間が不足したことや、送迎バスの手違い、連泊なのに2泊目が別のホテルだったり、全般に待ち時間が多くてストレスだったりと、大小様々なトラブルがあつて当事者の方々にお詫び申し上げます。

各分科会では熱心な討議が展開され、時間が足りなかった、助言の先生のお話が心に響いた、などの感想が寄せられました。司会・助言者・研修委員の皆様ありがとうございました。

交流会では、佐竹太鼓や西馬音内盆踊りで大いに盛り上がり、保育の道を歩む者同士の心が一つになり、和やかで温かい交流が出来たと感じました。

2日目の記念講演は、グローバルティーチャー・トップ10の高橋一也先生のレゴブロックを使ったユニークな講演でしたが、3歳からの教育・保育の大切さを再確認するとともに、ユーモアもあり分かり易いと大好評でした。今話題の中学生プロ棋士藤井四段が、幼少期に好んで遊んだというキューボロにも通ずるものがあるように思います。子ども達は目の前の玩具や素材で想像の世界を組み立てています。我々大人もドラえもんの魔法のメガネで子どもの世界が見えたら楽しいでしょうね。

色々と至らぬ点もありましたが、参加いただいた皆様から励ましやお褒めの言葉を頂き、疲れも吹き飛びました。大会の準備、開催を通じて私達実行委員が一つ成長したと思いますし、湯沢雄勝の職員同士の結びつきが強くなったのは大きな財産だと思います。

ご指導ご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます。



## 第1分科会 ●子どもの育ちを保障する

### 新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者 82名

提案者 田仲 真紀子（若竹幼児教育センター主任保育教諭） 助言者 奥山順子（秋田大学教育文化学部  
子ども発達・特別支援講座教授）  
伊藤 深有希（若竹幼児教育センター保育教諭）  
藤田 純子（西脇東保育園副主任保育士） 高橋大成（沼館保育園園長）  
藤田 未来（石脇東保育園）

#### 【主な提案内容】

- 保育日誌やエピソード記録などを基にカンファレンスを行い、子どもの内面を探る事で幼児理解を深めたり、保護者との信頼関係を築いたりした。子ども一人一人にきちんと目を向け、幼児理解を深めていく事が大切なのではないかと考える。
- 「人と関わる力」に視点を置いて子ども像を明確化し、多角的な視点から考察した援助や配慮を実践した。全体を見ながらも一人一人を大切にしたい保育が重要で、自分の思いを認めてもらう存在である保育者の関わりが、大きく結び付くのではないかと考える。

#### 【助言者から】

- 子どもは自分らしい姿を認めてもらう事で自己発揮する。一生懸命子どもの良い所を見ていきませんか!!
- 子どもは体感・実感する事で育っていく。総合的な育ち（五領域）を保障し、一人一人の内側（心情・意欲・態度）に丁寧に即していく事が大事。
- 子どもの必要な育ちが家庭で得られない時は、子どもに寄り添い、励まし、勇気づけ、たくさん経験できるように園で保障する事が大切。
- 心情・意欲・態度が促される環境・保育になっているか、もう一度考えてほしい。
- 保育者間で、“絶対にここだけは変わらずに大事にする”という基本的な保育感の共有が大切で、ずっと継続されていくと良い。

## 第2分科会 ●子どもの育ちを保障する

### 配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて

参加者 71名

提案者 工藤 悦子（わんぱくはうす主任保育士） 助言者 高田あづさ（秋田県稲川支援学校教諭  
特別支援教育コーディネーター）  
山谷 美千保（二ツ井子ども園保育士）  
山下 悦子（二ツ井子ども園保育士） 白瀬 真紀子（岩谷保育園園長）

#### 【主な提案内容】

- 「気になる子」に対して成長過程や関わり方のカンファレンスを行う中で、愛着形成に問題があるのではという問題点が見えてきた。園の一方的な支援ではなく、保護者の子育てに対する気持ちに寄り添い、アンケート、イベント等実施し、専門機関との連携に取り組みながら、保育園と家庭が同じ姿勢での育ちに関われる手立てを考察した。
- 気がかりな子どもに関わる保育者の悩み（思うように保育を進められない・支援の手立てが見えない等）から、園全体で支援していくために、特別支援教育の園内委員会を立ち上げる。個別指導計画の作成を基に協議や評価・園内外の研修への参加・外部機関や保護者との連携を図りながら考察した。

#### 【助言者から】

- 愛着形成の問題。心配を共有できないもどかしさ。上から指導するのではなく、押ししたり引いたりしながら寄り添っていく。熱くなりすぎると、シャッターを降ろされてしまう。
- キーワードは『安心感』これがベースにないと、育っていかない。心に蓋をさせない関わり方を。「不安な気持ちを出してもいいよ」と丸ごと受け止めることはとても大事。
- 支援の必要な子は、感覚の偏りが見られ、どのような感覚を持っているか、対応性が大事になる。
- コミュニケーションが上手にとれない子に対する「注目しないという支援」は有効で、好ましいことをした時にのみ注目する支援を是非取り入れて欲しい。

- 個別指導計画は、肯定的目標にする。
- 絵カードは子ども自身が気付き、見通しを持ちやすくしていくための支援。
- 得意なことがそれぞれ異なったりするので、多様な保育者の中で育てていくことが大事なのではないか。
- 「いない子はいない。この子がいるおかげで。」と、共につくるクラス。「自分は大切にされている」と思えるように、子ども理解に努め、どの子にも光を。

### 第3分科会 ●子どもの育ちを保障する 保育者の資質向上を図る

参加者 76名

提案者 長岐 文子 (鷹巣中央保育園保育士) 助言者 蛭田 一美 (聖園学園短期大学講師)  
長谷川 瑠衣子 (南通りすこやか保育園主任保育士) 澤口 勇人 (秋田チャイルド園園長)

#### 【主な提案内容】

- 新体制になり様々な職員がおり、研修を行うにあたり「共通理解の難しさ」「意見の出しにくさ」という課題があった。「保育班」(保育目標に向けての保育の見直しをする。)  
「保護者班」(子育て支援)「職員班」(職員が気持ちよく働ける環境づくりをする。)と少人数に分かれ研修をすることで職員一人一人が責任を持ち自発的に行動できるのではないかと考える。(話しやすくなったことで話し合いの時間が延びがちに。効率よく時間短縮ができるようにすることが今後の課題である。)
- ミーティングでは経験年数の差から発言がしにくい、共通理解が難しいという課題があった。「話し合いの形態の工夫」「リーダーとサブリーダーの思いの違いを埋める」「他者評価から自分の苦手分野を知る」等の様々な具体的な手立てを用いることで、職員それぞれが長所、短所を肯定的に捉えること、考えを受け入れることや傾聴するスキルを備えることにより豊かな人間性を築けるのではないかと、また、職員の関係づくりから子どもや保護者に対しても傾聴してかかわる力が育っていくと考える。

#### 【助言】

- 振り返りの大切さ振り返りがあるから、計画が立てられる。ドキュメンテーションでの振り返りがわかりやすかった。
- 色々な職種の人と話すことは大変だが、職員全員で子について話したことは重要。
- 時間を短くするミーティングの手立てとあつたが時間をかけることで深まる。一定の時間は必要。
- 園長・主任がスーパーバイザーになり、愚痴や雑談をなくし、目的に合ったミーティングをしてほしい。
- リーダーやサブの思いの違いはなぜ出たのか。それを意識すること。
- 360度評価は何を評価するか。ほめるか叱られるかになりがち。評価は相手に伝える事ができるかほめる事ができるか。何をどんなふうに？
- 発表園になると頑張るが発表と共にフェードアウトしてしまいがち。ミーティングやコミュニケーションのとりかたは形を変えても継続してほしい。



## 第4分科会 ●子育てライフを支援する 地域の子育て家庭への支援の充実にむけ

参加者 37名

提案者 渡邊 晶子(金森保育園園長) 助言者 井上 英樹(秋田県教育庁南教育事務所指導主事)  
嶋田 しのぶ(森岳保育園主任保育士) 小塚 光子(認定こども園しゃろーむ園長)  
小田嶋 美代子(相愛保育園保育士)

### 【主な提案内容】

○子どものより良い育ちについて考え、アンケート結果から保護者が抱える不安を読み解き、園を基軸に保護者、地域の人と共に手を取り合い、一緒に子育てを楽しめる保育を目指した研究。

○地域の実情に応じた子育て支援プランを再構成し、「ひとごち」をキーワードに園を拠点とした、安心できる関係づくりの方法や、郷土愛をもった子どもの育成が地域を支えていく、見通しのもてる子育て支援を目指した研究。

### 【助言者から】

○各園の特色に合った子育て支援の取り組みはすばらしかった。

○園の意図を伝えることにより、園の取り組みが見え、安心できる人や場所になる。大切なことは、研究を継続していくことである。

○子育て支援の PDCA。課題を改善していくことで地域との関係性がでてくる。社会みんなで育てていくことが大切である。

○子育て支援のポイント

①園と保護者がお互いの信頼関係のもと関係性を築くこと。

②保育理念、園の特色を生かして進めていくこと。

③専門性を発揮し、子育てを通して喜びを共有していくこと。

④地域の保護者が参加しやすく状況に合わせた支援を受けられるようにすること。

## 第5分科会 ●子育てライフを支援する

### 家庭や地域との連携による食育の推進

参加者 32名

提案者 小林 純子(西館保育園主任保育士) 助言者 谷口 典子(秋田県栄養士会 理事)  
阿部 美紀子(西館保育園保育士) 大塚 京子(勝平保育園園長)  
辻永 貴子(ほどの保育園主任保育士)  
菅原 彩子(ほどの保育園栄養士)

### 【主な提案内容】

○生きていくために大切な“食”。家庭と協力して、園で様々な食育活動に取り組むことで、子どもの食べる喜びへと繋げることを目指した研究。

○子ども自身が収穫の喜び、作る喜びを体験することで“食べたい”“知りたい”という気持ちを持ち、生きる力につながるのではないかと仮説から食環境を深めた実践研究。

### 【助言者から】

○保護者を巻き込みながら、様々な突き詰めた取り組みが確実に成果となり、良い結果に繋がった研究発表である。

○研究の出発点は、子どもの姿から問題を見つけ取り組んでいる。どちらの園も、給食と保育を一緒に生活の一部として大切にしてくれているのでありがたく思う。

○食材やマナーなど色々な面からの食育をしている。三大栄養素の見せ方も上手で、自分の体を大事にする意識が薄れている大人の食育にもなり、体に向き合う点で良い。職員も栄養の知識を学んでる姿勢が素晴らしい。

○クッキングや定食作りなど、子ども達の興味・関心を引き出した取り組みになっている。クッキング、試食会など減塩を意識し、小さい頃から薄味に慣れていくとよい。



## 第6分科会 ●多様な連携と協働をつくる

### 子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク

参加者 33名

提案者 佐藤 麻衣子（中仙東保育園副主任保育士） 助言者 小松 美幸（秋田県幼保推進課指導主事）  
高橋 宣行（三重保育所保育士） 讃岐 信孝（みつば保育園園長）

#### 【主な提案内容】

- 地域の人達との様々な交流や体験の中で培っていく喜びや感動は、人と関わる力を育み、自信や愛着、自己肯定感につながっていくのではないかと。これまでは大きく一つの枠で捉えていた地域の人達との交流を、「和」（老人クラブのお年寄りとの触れ合いを通して温かい気持ちになる）、「輪」（地域の活動に参加することを通して人の役に立つ喜びを味わう）「WA!!」（小・中学生との交流を通して憧れたり感動体験をしたりする）の3つのつながりとして分け、その関わりの中で子ども達の心の中にはどんな育ちが見られるのか探っていく。
- 多様な人との関わりや地域のよさを生かした保育を進める意義や目的を全職員で共通理解するとともに、各年齢において目指す子どもの姿を明らかにしたうえで保育や行事、連携を進めることによってこどもがふるさとを大好きと思うことができるのではないかとという仮説のもと、異年齢児交流や地域・小学校との連携の実態と問題点を共有化し、「人と関わる取組み」と「ふるさとの良さに触れる取組み」の実践研究を行った。

#### 【助言者から】

- 地域で育てる大事さを共通理解し、行事や取組みがマンネリにならないよう、子どもの育ちの視点から取り組んだことが、受身的な地域交流でなく、子ども主体の交流になったと思う。継続的に取り組むことが大事で、地域で育てるといことが地域を育てるといことにもつながり新しいステップとなる。
- どの園も事情や特色を生かして交流している。負担感もあると思うが、子どものどんな育ちにつながるのかという視点から見ていくことも一つの方法である。自己肯定感はずべての育ちの根っこになり学びにつながり、主体性は様々な子どもの育ち、生きる力につながる。将来の生きる力につながっていることを意識して取り組んでほしい。
- 小学校との連携は、円滑な接続という点からもふだん交流していく中で育てている力を学校に伝えてほしい。
- 少子化・地域の広域化で隣近所と子ども達が関わる暮らしが難しくなっている中で、日々の生活や歩ける範囲での交流を通して子ども達の主体的な行動が芽生えている。地域の身近に交流する大人を見つけて大事にしてほしい。



## 第7分科会 ●子育て文化を育む

### 保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～

参加者 23名

提案者 佐藤 祐子 (岩見三内保育所保育主任)  
高橋 真紀 (大川西根保育園主任保育士)

助言者 畠山 君子 (聖霊女子短期大学生活文化科講師)  
真坂 伸子 (矢島保育園園長)

#### 【主な提案内容】

- 地域に開かれていく保育所を考え、地域交流で地域の人々の多様な価値観に触れる楽しい経験をとおし子どもたちの心を豊かに育て、保護者や地域に発信して保育所、家庭、地域の相互理解を考えていく取り組みの研究。
- 音楽をとおして地域の方々と触れ合う機会を増やすことで人と関わる楽しさや喜びを感じ、親しみや思いやりの気持ちが育まれる実践の取り組みの研究。

#### 【助言者から】

- 地域の保育所、地域を見直す取り組みとして子どもが少ないこともあり、つながりが自然であり、地域を理解し地域の良さを引き出し関わっている。子どもも意識しながら取り組める身近にある資源が大切である。
- 発信した事への意見や感想を受けて、それをどう次につなげていくか、どう話し合っていけたらいいか、という意識を保育者自身が持つていく。続けていくこと、発信していくこと、同じことでも少しずつ変化を持たせていくことが大切である。
- 今すぐ見えなくても楽しい経験は残っているもの、そこを上手く育てていく。
- 一つのことに取り組むと保育者はそこに力を入れすぎることがある。子どもの姿から取り組みを考えること、音楽だけでなく他につなげていくと良いつながりが出てくる。
- どういう育ちにつながるのか、どういうふうにするのかを大切にしていく。
- 子どもの興味を引き出す環境設定、子どもの本当の興味は何かをわかっていなければならない。
- 保育所は子育ての拠点センターである意識を持つ。地域力を見極め、環境を準備する保育者の力が求められる。子どもを守って育てる。社会の中で人とかかわる力を身につける。

## 第8分科会 ●子育て・子育てを支援する仕組みをつくる

### 公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割

参加者 33名

提案者 佐藤 美和子 (西目保育園保育士)  
大友 美香 (西目保育園保育士)  
伊勢谷 則子 (なるせ保育園主任保育士)  
藤原 早苗 (なるせ保育園主任保育士)

助言者 高橋 周子 (湯沢市福祉保健部子育て支援課主幹)  
近藤 美穂子 (湖岸保育園園長)

#### 【主な提案内容】

- 保護者や地域社会、関係機関との連携のもと、子どもを取り巻く支援の輪が保護者や地域社会と協力し、その育ちを支えることで、家族支援に繋がったケースと保育者の思いがうまく伝わらなかったケースについての事例研究。
- 保育園が基軸となり、行政と積極的な意思疎通を図りながら、関係機関や地域との交流を重ね、双方の子育て支援やネットワークの更なる充実、世代間交流を通したふるさと教育の促進・地域の教育力の活用、保育の改善や向上等を目指した実践研究。

#### 【助言者から】

- 公立は関連機関との連携が図りやすい環境にある。
- 「すべては子どもの成長に繋がる」という保育者の思いが強く伝わってきた。
- 子どもの数だけ背景があるので、その取り組みがいつかは伝わると思われる。
- 出会い、体験、交流に加え子育て支援チームが担っている連携も大きい。
- 子どもの育ちや家族の思いを読み取って会議を重ねていることが、研究発表から感じられる。
- 子育てをする親の幼さ、子育ての力の弱さを年々感じている。親育てが今後の課題である。



高橋優の歌にのせて  
「十文字がみんな大好きになる〜♪」



岩見さ  
け！

記録者も必死！！！！  
お疲れ様でした



素敵な“ハッピ姿”でお出迎え  
ありがとうございました！！！！



## 第 66 回 北海道・東北ブロック研究大会へ選考・派遣される提案者の方々

分科会	園名	提案者	発表テーマ
1	若竹幼児教育 センター	田仲 真紀子主任保育教諭 伊藤 深有希保育教諭	「どきどき わくわく たのしいね」
	石脇東保育園	藤田 純子副主任保育士 藤田 未来保育士	「人と関わる力を育むために」
2	二ツ井子ども園	山谷 美千保保育士 山下 悦子保育士	「みんながHAPPYな 子ども園をめざして」
3	鷹巣中央保育園	長岐 文子保育士	「保育者の資質向上を 目指して」
4	金岡保育園 森岳保育園	渡邊 晶子園長 嶋田 しのぶ主任保育士	「いっしょに子育て」
	相愛保育園	小田嶋 美代子保育士	「ひ・と・ご・こ・ち！ ～見通しの持てる地域子育て 支援の在り方を考える」
5	ほどの保育園	辻永 貴子主任保育士 菅原 彩子栄養士	「食」が子どもを育てる」
6	中仙東保育園	佐藤 麻衣子副主任保育士	「つなげよう・つながろう 地域の和・輪・WA！！」
7	大川西根保育園	高橋 真紀主任保育士	「みんなのこころを つなげよう」
8	西目保育園	佐藤 美和子保育士 大友 美香保育士	「公立保育所の使命と 地域社会での役割」
	なるせ保育園	伊勢谷 則子主任保育士 藤原 早苗主任保育士	「地域と連携する保育園経営 のあり方」

## 第 61 回 全国保育研究大会 ご出場 おめでとうございます！

発表テーマ「どきどき わくわく たのしいね」

若竹幼児教育センター 田仲 真紀子主任保育教諭  
伊藤 深有希保育教諭

平成 29 年 11 月 15 日（水）～17 日（金）兵庫県神戸市で開催されます。



## 編集後記

6月19日、平成29年度より2年間の任期で広報委員11名が揃いました。どなたか、経験者がいらしゃるだろう・・・と、軽い気持ちで会場入りしたのも束の間、全員が未経験！急に暗いトンネルに入った気持ちになりましたが、『保育あきた瓦版』の発行が目前に迫っており、委員同士、名前と顔が一致しないまま編集作業に入りました。

本日、お届けいたします第51号が新メンバーで作成した記念すべき第1号です。

広報委員会では、瓦版をメールで送信できないか？カラーで発行することは可能なのか？など、個性豊かで頑張り屋なメンバーがアイデアを出し合っています。会員の皆様からのご意見ご要望もお聞かせください。お待ちしております。

## 広報委員名

広報委員長	大坂 江利子 (八森こども園)
広報副委員長	加賀屋 寛子 (かわしり保育園)
委員名	阿部 明子 (大湯保育園)
	斎藤 玲子 (綴子保育園)
	宮腰 真澄 (船川保育園)
	石田 義成 (白百合保育園)
	福井 洋子 (岩見三内保育所)
	藤原 真智子 (下川大内保育園)
	戸嶋 富美子 (おおたわんぱくランド)
	石田 幸子 (三重保育所)
	佐藤 浩子 (にしもないこども園)